

## 生徒の仲間集団の排他性に関する研究

有 倉 巳 幸〔鹿児島大学教育学部附属教育実践総合センター〕

### The Study of Peer Group Exclusivity in Students

YUKURA Miyuki

キーワード：仲間集団、排他性欲求、排他性規範、学級適応感、自集団適応感

#### Abstract

The purpose of this study was to examine the effect of peer group exclusivity in early adolescence on class adjustment and adjustment of belonging to that group (*i.e.*, their group adjustment). Exclusivity was regarded as both a respondent's desire to be part of an exclusive peer group (*i.e.*, exclusivity desire) and a norm of exclusive conduct within his/her peer group (*i.e.*, exclusivity norm). The study looked at both junior high and high school students and observed the following results.

At first, exclusivity desire and exclusivity norm were compared by school year and sex. Female students in all school years were found to be significantly stronger in exclusivity desire, but only female students in junior high schools were significantly stronger in the exclusivity norm than their male counterparts.

Next, the hypothesis that the lower the exclusivity desire is, might be the lower their group adjustment when the exclusivity norm is high, and the one that the higher the exclusivity norm was, might be the lower the class adjustment was examined. When analyzing them, it divided into four analysis groups by the junior high school student or the high school student, and boy or girl. And to verify the hypothesis, hierarchical multiple regression analysis that entered group/class adaptation into the dependent variable for the independent variable into exclusivity desire, exclusivity norm, and their interaction was used. As a result, these hypotheses were supported in the junior high school boy and the high school girl.

小学校高学年から中学校にかけて、急激に増加するいじめや不登校は、学校現場で常に取り上げられる課題であるが、これらの問題の背景に、友人関係の問題が含まれていることは少なくない。この友人関係に起因する問題を理解していくためには、その関係がもつ親密性の裏返しとも言える排他性に着目していく必要があろう。排他性とは、集団や関係において、その集団や関係以外の者を受け入れないことを意味し、対人的なトラブルとの関係がこれまで指摘されてきた (e.g., 石田・小島, 2009)。そこで、本論文では、友人関係のうち、特に仲間集団にみられる排他性と、その集団および学級集団への適応感との関係を検討していくことを主たる目的とする。

この友人関係や仲間集団と適応感との関係につ

いて検討する場合、その関係や集団を通して見られる発達的变化に着眼する必要がある。なぜならば、発達段階によって友人との仲間集団の構造やその内部でのコミュニケーションのとり方が異なり、それに伴って、適応感に及ぼす影響も異なるからである。こうした友人関係の発達的变化に着目した研究の一つに発達段階における友人関係の構造や機能に着目した研究 (e.g., 保坂, 1996) がある。

これらの研究に関して言えば、幼児期や児童期前期では、近接性や愛着性をベースに友人関係が形成され、児童期後期以降、徐々に尊敬や信頼をベースに形成されていくといった知見 (c.f., 遠矢, 1996) や、ギャンググループやチャムグループ、ピアグループといった集団の質の違いと発達

的变化に着目した研究がある (e.g., 黒沢・有本・森, 2003)。

これらの知見に共通しているのは、集団の発達の变化が外顕的 (overt) な性質から内潜的 (covert) な性質へと移行する点であろう。そして、内潜的な性質への移行は、観察者である親や教師の認知にも影響を及ぼす。つまり、児童期初期の仲間集団は、外から観察して見える部分と、その内部で起こっている部分がおおよそ対応しているので、親や教師にとって理解しやすいが、思春期以降の仲間集団は、外から観察して見える部分と、その内部で起こっている部分とのズレが大きくなっていくため、理解しにくくなる。

このズレが大きくなる要因の一つとして、集団の排他性の高さが挙げられる。排他性は、「自分の仲間であるかどうかによって相手に対する態度を変えたり、自分の仲間と活動することに比べ、仲間以外の児童と活動することを楽しくないと感じたりする程度の強さ」と定義される (三島, 2004)。排他性が高いと、仲間以外の他者と関わる機会が少なくなるため、集団内部で起こっていることが他者にわかりにくくなる。教師にとって排他性の高い仲間集団は、いつも一緒に行動しているため、仲がよいと考えてしまう。しかし一方で、交友関係を絶ち、他の関係をもつことが難しくなるという面をもつため、いざこざが起こっても集団以外の学級成員に認知されにくくなる (黒川・吉田, 2006)。

三島 (2004) は、上述の定義を踏まえ、児童の排他性を測定する尺度を開発した。この排他性尺度について因子分析を行ったところ、「親和的・独占的かかわり」因子と、「排除的・固定的かかわり」因子の2因子を抽出した。「親和的・独占的かかわり」とは、構成される内容から、相手を独占したいと感じ、一緒に行動したいという気持ちであり、一方の「排除的・固定的かかわり」は同様に、友人である子とない子を区別し、友人である子と一緒に過ごすのが楽しいという気持ちである。

これらの得点の性差を検討した結果、「排除的・固定的かかわり」では性差が見られなかったが、「親和的・独占的かかわり」では、女子の方

が男子より得点が高かった (三島, 2004)。この結果は、この尺度を改良した仲間集団指向性尺度でも同様の知見を得ている (三島, 2008)。この結果から示唆されるのは、女子の仲間集団における排他性は「親和的・独占的かかわり」によって特徴づけられることである。つまり、女子は男子と比べて、仲間と仲良くになりたい気持ちや他の人と仲良くしてほしくない気持ちが強いと考えられよう。

ところで、この排他性を考えていく場合、三島 (2004, 2008) が指摘するような、個人の感情や欲求レベルで理解される排他性の他に、彼らが所属している仲間集団がもつ排他性が考えられる。後者の排他性は、所属している仲間集団の行動規範とでもいうべきものであり、その仲間集団に所属しているメンバーがとる同一行動からなる。

後者の排他性の高さは、関係性の深まりと共に見られるもので、関係内部への関心・関与の高さが、そのまま関係外部との間に壁を作り出し、外部とのコミュニケーションを困難にさせる。関係内部では、こうした過程の中で、斉一性の圧力が高まり、同調に対しては受容という報酬が、逸脱者に対しては無視という形の制裁がとられることが明らかになっている (Schachter, 1951)。

後者の排他性を、三島 (2004) は、児童がグループの集団で話し合って回答した結果や、教師によるインフォーマル集団の評価によって測定した。

このうち、集団で話し合って回答した排他性は、その集団でコンセンサスを得たものか、一部の勢力の強い児童の結果の反映なのかは明らかではない。従って、この測定方法による集団の排他性の高さは、その集団に見られる排他的な性質を必ずしも反映していないと考えられる。加えて、グループに所属するメンバーの個人得点の平均とグループの得点は比較的強い正の相関が見られているが、個人得点の平均であるため、その中のメンバーが実際どのような勢力関係にあるのかは不明である。

また、教師の観察による集団外から見た排他性も、集団内部の排他性の程度を必ずしも反映していない。実際、三島 (2004) では、生徒のグルー

ブ評定と教師によるグループ評定との間に有意な相関は得られなかった。

そこで、有倉・乾（2007）は、三島（2004）が取り上げた排他性を、個人の排他的な感情・欲求を反映したものととらえ直し、「排他性欲求」と位置づけた。その上で、自分が所属する集団には、どのような排他的な行動が見られるのかを「所属集団の排他的行動規範（以下、排他性規範）」とし、尺度化を試みた。ただし、実際には、その集団に所属している児童・生徒の認知を測定しているため、厳密には、集団内部の排他性を反映しているとは言えないが、その集団内からみた認知レベルの排他性の一指標としてとらえることができよう。

有倉・乾（2007）は、小学校5、6年生および中学校1、2年生を対象に、これら二つの排他性指標が、所属する集団への適応感と、学級適応感に及ぼす影響について検討を行った。

まず、自分の所属する仲間集団が排他的であると認知するかどうか（排他性規範）が、その集団に所属する児童・生徒の学級および所属集団の適応感に影響を及ぼすだろうと予想された。つまり、自集団の排他性規範が強い場合、この強さは、仲間集団の外部でありかつ自身が所属する学級集団の存在や活動に対する低い評価の反映とみることができる。このことから、所属集団の排他性規範が高いほど、学級適応感は低くなるだろうと仮説を立てて、支持された。併せて、集団内においては、所属集団の排他性規範の高さは個人の欲求に制約を与えることが予想されるため、所属集団への適応感が低くなるだろうと仮説を立て、こちらも支持された。

一方、所属集団内の仲間といつも一緒にいたいという排他性欲求の強さは、その集団への愛着感、ひいては適応感を高めるだろうと仮説を立てて支持された。ただし、この排他性欲求の強さは、排他性規範が強い場合には問題ないが、この欲求が弱いとその集団に対する適応感が低くなると仮説を立てた。つまり、自分としては緩やかな風通しのよい仲間集団を期待しているにも関わらず、集団が強い排他性規範をもっていることによって、欲求と規範との間にズレが生じ、その集

団への適応感が低くなることが考えられた。この仮説も分析の結果、有意な交互作用傾向が認められ、所属集団内でストレスを感じている児童・生徒が存在する可能性が示唆された。

ところで、有倉・乾（2007）の知見は小学5年生から中学2年生を対象としており、ギャンググループやチャムグループといわれる友人関係を構成する時期と言われる（e.g., 保坂, 1996; 黒沢他, 2003）。

これらの研究によると、ギャンググループは、外面的な同一行動による一体感が重視される仲間集団であり、遊びが共有できない者は仲間からはずされる特徴を持ち、一般には小学校中学年くらいからの男子に多く見られる。チャムグループは、互いの類似性を言葉で確かめ合うという内面的な類似性の確認が重視される仲間集団であり、仲間間で通用する言葉を作り、通じない者を疎外することを特徴としており、一般には小学校高学年からの女子に多く見られる。そして、ピアグループは、内・外面とも異質性を認め、自立した個人として尊重しあう仲間集団であり、相違を明白にし、違いを乗り越え、自立した個人として共存し、互いの価値観や理想・将来の生き方を語り合う対等な関係であることを特徴としている。一般には、思春期後半の高校生から見られる。

ギャンググループやチャムグループは同一行動や同一の価値観によって結ばれており、これに対して、ピアグループは、メンバーの異なる価値観を受け入れられることが特徴である。このように、仲間集団の分類を考慮した場合、ギャンググループやチャムグループの排他性については、有倉・乾（2007）の研究から明らかであるが、ピアグループの排他性については明らかにされていない。ピアグループが高校生から見られることを考慮すると、これらのグループにおける排他性はどのように違うのであろうか。榎本（1999）の研究においても、中学生と高校生との仲間集団の違いを示唆しており、そうしたことを踏まえると、排他性という観点から仲間集団の特徴を捉えることは、仲間集団の発達的変化を理解する上で意義があると思われる。

以上の結果を受けて、本研究では、仲間集団の

排他性に関して、検討を行っていくが、その前に、本研究で使用する二つの排他性概念の独立性について吟味する必要がある。その理由としては、排他性欲求や排他性規範とともに、個人の認知を測定しているため、高い相関が認められるからである。

実際、有倉・乾 (2007) では、これらの指標をメディアンで2群に分け、自集団適応感や学級適応感に及ぼす影響を検討したが、これら指標の相関が高かったために、4群の人数にばらつきが生じていた。しかし、上述したように、これらはそれぞれ排他性の異なる側面を測定しており、構成概念としては独立している。この点を検討するために、青年期の仲間関係の形成・維持と密接に関連する大嶽 (2004) の「ひとりぼっち回避規範」との関連性を検討する。

大嶽 (2004) は、学校での生活をひとりぼっちで過ごすことは「変わった人」という他者からのネガティブな評価を受けることにより、不安を高めることを挙げ、そうした不安が生じる背景に「誰かと一緒にいなくてはいけない、ひとりではいけない」といった、共有された規範 (行動の望ましさ) が存在することを指摘し、これを「ひとりぼっち回避規範」と呼び、尺度化を図った。大嶽・石田・吉田 (2005) では改訂版を作成し、ひとりぼっち回避規範が高いほど、公的自己意識が高く、孤独感が低いことを明らかにした。

これらの知見を踏まえると、ひとりぼっち回避規範の高さは、特定の仲間集団に所属したいという欲求を高めると考えられ、その点で排他性欲求の高さと正の関連性が見られるであろう。しかし、排他性規範は、集団レベルの排他性であり、あくまでもその集団の行動傾向に関する指標であるため、関連性は見られないことが予想される。

この二つの排他性指標が独立していることを確認した上で、本研究では、以下の三つの仮説を検討する。

まず、発達的变化についてである。一般に、仲間集団が排他的になるのは、その特徴からチャムグループを構成する中学生までの時期と仮定される (坂本, 1996)、高校生以降では、異なる価値観を受け入れられるピアグループへと移行するとい

う知見 (黒沢ら, 2003) が得られていることから、発達的には、中学生の方が高校生より排他的な集団を作ることが予想されよう。仮説としては、排他性欲求、排他性規範ともに、中学生の方が高校生より高いであろう (仮説1)。

二つ目は、性差である。チャムグループが小学校高学年以降の女子の仲間集団の特徴であるという知見 (黒沢ら, 2003) や、上述した女子の仲間集団の特徴 (三島, 2004; 黒川・吉田, 2006; 有倉・乾, 2007) を踏まえると、女子の方が男子より排他的な集団を作ることが予想されよう。仮説としては、排他性欲求、排他性規範ともに、女子の方が男子より高いであろう (仮説2)。

三つ目は、二つの排他性の指標と適応感の関係である。有倉・乾 (2007) では、小学生・中学生を対象とし、排他性欲求と排他性規範を独立変数に、自集団適応感と学級適応感を従属変数として検討した。そして、上述したように、排他性規範を高く認知し、かつ排他性欲求の低い生徒の自集団適応感が低いこと、また、排他性規範を高く認知している生徒は低い生徒より学級適応感が低いこと明らかにした。この知見を踏まえると、本研究においても、排他性規範が高いと認知し、かつ排他性欲求の低い生徒が最も自集団適応感が低く (仮説3-1)、また、排他性規範を高いと認知する生徒は、低いと認知する生徒より学級適応感が低いであろう (仮説3-2)。

ただし、この結果は、男女込みで検討した結果であり、仲間集団の排他性の様相が男女で異なる知見 (三島, 2004) を踏まえると、男女とも同様の結果が見られるかは不明である。また、チャムグループからピアグループへ移行するという仲間集団の発達的变化に関する知見を考慮すると、中学生と高校生との間で同様の結果が見られるかも不明である。

それらは、男女あるいは中学生・高校生でそれぞれの排他性が適応感に異なる影響を与えるのか、それとも単にそれぞれの排他性指標の程度の問題なのか、この点を明らかにする必要がある。そこで、本研究では、この結果を性×学校種ごとに検討し、この知見の適用可能性を検討していきたい。

## 方 法

### 調査対象者と調査時期

鹿児島県内の中学1，2年生および高校1，2年生計1276名であった。このうち、欠損値のない1271名（男子665名，女子606名）を分析に用いた。内訳は，中学1年生（以下，中1）361名（男子200名，女子161名），中学2年生（以下，中2）432名（男子225名，女子207名），高校1年生（以下，高1）247名（男子127名，女子120名），高校2年生（以下，高2）231名（男子113名，女子118名）であった。中学校は市立2校に依頼し，ともに全校生徒数が800人以上の大規模校であった。高等学校も県立2校に依頼した。1校は定員900人の学校であった。もう1校は，定員240人の学校であった。調査は年末実施であったので，受験への配慮から3年生には実施しなかった。なお，調査時期は2006年12月中旬であった。

### 質問紙の構成

#### 1. フェイスシート

学校生活に関するアンケートという表題の下，アンケートの説明を記し，学年および性別を尋ねた。

#### 2. 学級適応感

小泉（1995）による教育環境適応尺度Ⅱのうち，級友関係（正），級友関係（負）の因子に高く負荷していた項目を中心に，有倉・乾（2007）が作成した9項目からなる尺度を使用した（例「このクラスは心から楽しめる」「自分はこのクラスからあまりよく思われていないと感じる（逆転項目）」）。本来，学級適応感は，教師への態度や学習の動機づけといった内容も考慮されてもよいと思われるが，本研究では，仲間関係の排他性を検討課題としていたこともあり，学級内の人間関係に対する適応感としてとらえた。

#### 3. ひとりぼっち回避規範

12項目からなる大嶽ら（2005）の尺度のうち，1項目「昼休みに友だちと一緒に食事をする」を除いて使用した。本調査を実施した学校はどこも，自分の席に座って給食や弁当をとることになっていたのので，不適切と判断したためである。

#### 4. 排他性欲求

三島（2004）の排他性尺度は，児童を対象に作られているので，生徒向けに表記を変えた。有

倉・乾（2007）で項目－全体相関の低かった「遊び相手がいつも同じだとつまらない」の1項目を削除した14項目から構成された。なお，学年×性別ごとの比較に使用するため，三島（2004）で抽出された「親和的・独占的かわり因子（以下，親和的・独占的因子）」と「排除的・固定的かわり因子（以下，排除的・固定的因子）」ごとに合計得点を算出した。

#### 5. グループの人数

学校の中で，いつも休み時間や昼休みのときに，必ず一緒にいたり遊んだりする友だちを思い浮かべるように指示し，その上で，自分を除いた人数と，同じクラスにいる人数を尋ねた。後者は，クラス内にいる友人の比率を算出するために使用した。

#### 6. 排他性規範

「自分のグループは新しい仲間を入れない」「自分のグループだけの決まりごとがある」など，有倉・乾（2007）で使用した9項目からなる尺度を使用した。

#### 7. 自集団適応感

学級適応感尺度の質問内容を自集団に置き換えて作成した9項目から構成された（例「自分のグループは心から楽しめる」「自分は自分のグループからあまりよく思われていないと感じる（逆転項目）」）。有倉・乾（2007）でも使用されたが，これには，仲間集団とそれ以外の級友全体との比較の意図がある。

以上，いずれも5件法（1：全くそう思わない～5：非常にそう思う；ひとりぼっち回避規範のみ，1：特にそうした方がいいとは思わない～5：非常にそうした方がいいと思う）にて実施し，点数が大きいほど，適応感が高く，また，規範や欲求が強いことを示すように得点化した。なお，学級規範も測定したが，学級適応感と高い相関（ $r=.71$ ）にあったため，本研究では分析しなかった。

### 手続き

上記の学級適応感，自集団適応感，排他性規範尺度の妥当性に関しては，大学院に在籍している現職の教員5名に，学級内の人間関係に対する適応感や思春期の仲間集団行動を測定するという意

図を伝え、項目の吟味を依頼することで、内容的妥当性を検討した。

また、調査にあたっては、実施した学校の校長および教頭、生徒指導主任に事前に質問紙を見てもらい、実施可能かどうかを判断してもらった。

本研究は実際の友人関係について尋ねたので、人権的な配慮として、以下の2つを行った。まず、学校宛には予め依頼文書を送り、その上で、中学生に関しては保護者の同意を得る文書を実施の1週間前に生徒便で送付した。保護者から同意を得られない場合、その生徒については実施を取りやめた。また、実施にあたっては、担任教師に手続きを別紙資料にて示し、ロングホームルームで実施してもらった。その際、実際の友人関係を尋ねる質問（いつも一緒にいる友人の数、排他的規範、自集団適応感）については、無理に回答せず担任の指示を仰ぐ旨の紙面を質問紙に挟んであった（上記の4と5の質問の間）。その結果、90名（7.19%）の生徒（中学生男子24名、女子20名；高校生男子29名、女子19名）が実際の友人関係を尋ねる質問の回答をしなかった。 $\chi^2$ 分析を行ったところ、有意差がみられ（ $\chi^2(3)=13.43$ ,  $p<.01$ ）、残差分析の結果、高校生男子（12.1%）において無回答者の割合が有意に大きかった。

## 結 果

### 各尺度の内的整合性の検討

まず、本研究で使用した尺度について、内的整合性の検討を行い、全体と男女ごとの平均と標準偏差を求めた。学級適応感尺度は9項目で $\alpha=.88$ であった。ひとりぼっち回避規範尺度は、11項目で $\alpha=.85$ であった。排他性尺度については三島（2004）に倣い、親和的・独占的因子に含まれる項目群と排他的・固定的因子に含まれる項目群ごとに算出した。その結果、親和的・独占的因子は、8項目で $\alpha=.69$ であった。排他的・固定的因子は、「遊び相手がいつも同じだとつまらない」の項目－全体相関が低く（ $r=.07$ ）、 $\alpha$ 値を下げたので、この項目を除外し、最終的に5項目で $\alpha=.71$ となった。なお、一部の分析（排他性欲求と命名して使用）には二つの因子の合計値を用いるので、13項目の $\alpha$ 係数を求めたところ、

$\alpha=.73$ であった。排他性規範は、「自分のグループは仲がよい」の項目－全体相関が低く（ $r=-.05$ ）、 $\alpha$ 値を下げたので、この項目を除外し、最終的に8項目で $\alpha=.77$ となった。自集団適応感尺度は9項目で $\alpha=.87$ であった。

排他性欲求については、内的整合性が多少低いものの許容範囲であると見なして、後の分析に使用した。なお、得点化に際しては、加算得点を項目数で割ったものを使用した。いずれもレンジは1～5点であった。

### 校種別×性別ごとの平均値

まず、休み時間に一緒にいる友人について、校種別×性別の2要因分散分析を行った（Table 1）。一つは、一緒にいる友人の数であるが、校種の主効果（ $F(1, 1173)=16.30$ ,  $p<.001$ ）および性の主効果（ $F(1, 1176)=50.49$ ,  $p<.001$ ）が有意であった。校種別では、高校生（ $M=5.47$ ）が中学生（ $M=7.01$ ）より有意に一緒にいる友人の数が少なかった。性別では、男性（ $M=7.60$ ）の方が女性（ $M=4.88$ ）より一緒にいる友人の数が多かった。もう一つは、クラスにいる友人の比率である。こちらは、クラスにいる友人の数を一緒にいる友人の数で割った値を分析に用いた。分散分析を行ったところ、校種（ $F(1, 1173)=105.57$ ,  $p<.001$ ）および性（ $F(1, 1173)=9.46$ ,  $p<.01$ ）の主効果と交互作用（ $F(1, 1173)=11.48$ ,  $p<.001$ ）が有意であった。校種では、高校生（85.30%）の方が中学生（65.15%）より、また、女子（78.25%）の方が男子（72.21%）よりクラス内にいる比率が高かった。また、交互作用が有意であったので、下位検定を行ったところ、中学生においてのみ、女子（71.49%）の方が男子（58.82

Table 1 性別×校種別の平均（標準偏差）

	男子		女子	
	中学生	高校生	中学生	高校生
友達の数	8.43(7.98)	6.77(8.42)	5.59(3.87)	4.16(2.53)
同じクラスにいる割合	58.82(35.72)	85.61(26.64)	71.49(34.68)	85.00(26.76)
排他性欲求	2.97(0.59)	2.97(3.47)	3.47(0.60)	3.18(3.20)
(親和・独占因子)	2.49(0.67)	2.62(0.55)	3.29(0.68)	2.99(0.61)
(排除・固定因子)	3.73(0.77)	3.54(0.73)	3.76(0.75)	3.48(0.76)
排他性規範	2.03(0.70)	2.05(0.63)	2.27(0.72)	2.03(0.67)
自集団適応感	4.27(0.61)	4.00(0.66)	4.31(0.65)	4.31(0.60)
学級適応感	3.71(0.80)	3.72(0.70)	3.71(0.77)	3.87(0.77)
ひとりぼっち回避規範	3.52(0.68)	3.50(0.65)	3.68(0.64)	3.35(0.77)

Note. ( )内は標準偏差、同じクラスにいる割合の単位は%である。

%)より比率が高かった。

次に分析に使用した6つの指標(排他性欲求、親和的・独占的因子、排他的・固定的因子、排他性規範、自集団適応感、学級適応感、ひとりぼっち回避規範)について、校種別×性別の2要因分散分析を使用して平均値の比較を行った。

排他性欲求では、校種( $F(1, 1263)=18.82, p<.001$ )および性( $F(1, 1263)=116.52, p<.001$ )の主効果、交互作用( $F(1, 1263)=20.98, p<.001$ )が有意であった。校種においては、中学生( $M=3.22$ )が高校生( $M=3.08$ )より有意に排他性欲求得点が高く、仮説1を支持していた。また、女子( $M=3.33$ )の方が男子( $M=2.97$ )より排他性欲求得点が高いと高く、自分の仲間とそれ以外によって態度を変える気持ちは女子の方が強いことが示された(仮説2を支持)。交互作用も有意であったので、単純主効果検定を行ったところ、女子において、中学生( $M=3.48$ )が高校生( $M=3.18$ )より有意に排他性欲求得点が高かった。男子は差がなかった(中学生 $M=2.97$ , 高校生 $M=2.98$ )。

親和的・独占的因子では、校種( $F(1, 1263)=5.71, p<.05$ )および性( $F(1, 1263)=251.66, p<.001$ )の主効果、交互作用( $F(1, 1263)=34.36, p<.001$ )が有意であった。女子( $M=3.14$ )の方が男子( $M=2.56$ )より平均値が高く、この結果は三島(2004)と同様であった。校種では、中学生( $M=2.89$ )の方が高校生( $M=2.81$ )より有意に高かった。交互作用については、いずれの校種においても、女子の方が男子より親和的・独占的であったが、高校生では性差が縮まっていた(中学生:男子 $M=2.49$ , 女子 $M=3.29$ ;高校生:男子 $M=2.62$ , 女子 $M=2.99$ )。

排他的・固定的因子では、校種の主効果のみ有意であり( $F(1, 1263)=27.74, p<.001$ )、中学生( $M=3.75$ )が高校生( $M=3.51$ )より平均値が高かった。性差はなく(女子 $M=3.63$ ;男子 $M=3.64$ )、この結果も三島(2004)と同様であった。

排他性規範でも、校種( $F(1, 1173)=7.04, p<.01$ )および性( $F(1, 1173)=7.66, p<.01$ )の主効果、交互作用( $F(1, 1173)=9.32, p<.01$ )が有意であった。校種では、中学生( $M=2.15$ )の方が

高校生( $M=2.04$ )より有意に得点が高かった(仮説1を支持)。また、女子( $M=2.15$ )の方が男子( $M=2.04$ )より排他性規範得点が高いと高かったが、交互作用が有意だったため、単純主効果検定を行ったところ、中学生のみ、女子( $M=2.27$ )の方が男子( $M=2.03$ )より、排他性規範得点が高かった(仮説2を一部支持)。

自集団適応感でも、校種( $F(1, 1173)=12.39, p<.001$ )および性( $F(1, 1173)=21.77, p<.001$ )の主効果、交互作用( $F(1, 1173)=13.42, p<.001$ )が有意であった。中学生( $M=4.29$ )の方が高校生( $M=4.15$ )より、女子( $M=4.31$ )の方が男子( $M=4.13$ )より有意に得点が高かった。交互作用に関しては、下位検定の結果、高校生においてのみ、性の単純主効果が有意であり、女子( $M=4.31$ )の方が男子( $M=4.00$ )より自集団適応感が高かった。

学級適応感では、校種の主効果のみ有意であり( $F(1, 1263)=3.92, p<.05$ )、高校生( $M=3.80$ )の方が中学生( $M=3.71$ )より学級適応感が高かった。

ひとりぼっち回避規範では、校種の主効果( $F(1, 1263)=19.21, p<.001$ )と交互作用( $F(1, 1263)=15.32, p<.001$ )が有意であった。単純主効果検定の結果、女子においてのみ、中学生( $M=3.68$ )が高校生( $M=3.35$ )より有意に得点が高かった。

#### 排他性欲求・排他性規範とひとりぼっち回避規範との関係

本研究で扱う二つの排他性指標間の相関は、 $r=.42$  ( $p<.001$ )であったので、この二つの排他性に関する構成概念が独立していることを確認するために、一方の排他性を制御してひとりぼっち回避規範との偏相関を求めた。その結果、排他性欲求とは $r=.42$  ( $p<.001$ )であったが、排他性規範とは $r=-.06$  (*n.s.*)であり、ひとりぼっち回避規範は、排他性欲求とのみ関連が見られる概念であることが示された。

#### 排他性欲求と排他性規範が自集団適応感および学級適応感に及ぼす影響

有倉・乾(2007)は、小5から中2を対象に、排他性欲求と排他性規範が自集団適応感および学

級適応感に及ぼす影響を検討したところ、集団の排他性規範が高く、個人の排他性欲求が低い児童・生徒の自集団適応感や学級適応感が低いことを明らかにした。しかし、サンプルが多くないために、校種や性別によって同様の関係がみられるかについて検討していなかった。これまでの議論を考慮すると、中学生と高校生、男子と女子では、その影響の現れ方が異なるかもしれない。そこで、本研究では、これらの関係性を校種×性別ごとに検討し、適用可能性を見ていくことを目的とした。

分析の手順として、まず、自集団適応感と学級適応感とともに、小泉 (1995) の尺度をもとに作成したこと、自集団の適応感と学級適応感の高さと密接な関係があることが予想されたので、相関係数を求めた。その結果、中学生男子は、 $r=.43$  ( $p<.001$ )、中学生女子は、 $r=.52$  ( $p<.001$ )、高校生男子は、 $r=.61$  ( $p<.001$ )、高校生女子は、 $r=.46$  ( $p<.001$ ) であった。そこで以下の分析にあたっては、階層的重回帰分析を用い、一方の適応感を統制した上で、排他性欲求および排他性規範の効果を検討した (Table 2, 3)。

階層的重回帰分析は前田 (2008) に倣って進めた。まず、説明変数となる排他性欲求、排他性規範、および一方の適応感について、変数の中心化を行った。中心化とは、個々のデータから平均を引くことによって算出される。中心化を行う理由は、交互作用項との多重共線性を回避するためである (Aiken & West, 1991)。次に、重回帰分析を行うわけだが、例えば、自集団適応感を目的変数とした場合、step 1 では、中心化を行った学級適応感を投入し、影響を統制する。step 2 では、中心化を行った排他性欲求および排他性規範を投入し、主効果を検討する。そして、step 3 では、中心化を行った排他性欲求と排他性規範の交互作用項を投入する。変数選択方法としては強制投入法を用いた。結果として、交互作用項が有意であった場合、下位検定として、単純傾斜 (simple slope) の有意性検定を行った。

中学生男子 ( $n=401$ ) では、目的変数に自集団適応感を投入したとき、step 2 での増分 ( $\Delta R^2=.04$ ,  $p<.001$ ) が有意であり、排他性欲求 ( $B=.22$ ,

Table 2 自集団適応感を目的変数にした階層的重回帰分析の結果 (強制投入法)

n	中学生		高校生	
	男子 (401)	女子 (350)	男子 (211)	女子 (219)
	B	B	B	B
(定数)	4.24***	4.28***	3.96***	4.27***
学級適応感	.32***	.43***	.50***	.37***
排他性欲求	.22***	.16**	.27***	.20**
排他性規範	-.13**	-.10*	-.20***	-.13*
交互作用	.12*	.09	.13	.27**
$R^2$ (step1)	.19***	.27***	.37***	.21***
$\Delta R^2$ (step2)	.04***	.02*	.05***	.04**
$\Delta R^2$ (step3)	.01*	.00	.01	.03**

Note. \*\*\* $p<.001$ , \*\* $p<.01$ , \* $p<.05$ , B の値は、なお、step3 における標準化されていない偏回帰係数である。

Table 3 学級適応感を目的変数にした階層的重回帰分析の結果 (強制投入法)

n	中学生		高校生	
	男子 (401)	女子 (350)	男子 (211)	女子 (219)
	B	B	B	B
(定数)	3.75***	3.73***	3.75***	3.92***
自集団適応感	.53***	.60***	.63***	.58***
排他性欲求	.06	-.02	-.01	-.19*
排他性規範	-.14*	-.06	-.06	-.19*
交互作用	-.07	.01	.16	-.23
$R^2$ (step1)	.19***	.27***	.37***	.21***
$\Delta R^2$ (step2)	.01*	.00	.00	.08***
$\Delta R^2$ (step3)	.00	.00	.01	.01

Note. \*\*\* $p<.001$ , \*\* $p<.01$ , \* $p<.05$ , B の値は、なお、step3 における標準化されていない偏回帰係数である。

$p<.001$ ) および排他性規範 ( $B=-.12$ ,  $p<.01$ ) の偏回帰係数が有意であった。つまり、排他性欲求が低いほど、また排他性規範が高いほど、自集団適応感が低いことが示された。加えて、step 3 での増分 ( $\Delta R^2=.01$ ,  $p<.05$ ) も有意であり、交互作用項の偏回帰係数が有意であった ( $B=.12$ ,  $p<.05$ )。単純傾斜の有意性検定を行ったところ、排他性規範が高い場合のみ、排他性欲求の単純傾斜が有意であり (high:  $B=.30$ ,  $p<.001$ ; low:  $B=.13$ ,  $.05<p<.10$ )、仮説 3-1 を支持していた (Figure 1)。目的変数に学級適応感を投入したときは、step 2 での増分 ( $\Delta R^2=.01$ ,  $p<.05$ ) が有意であり、排他性規範 ( $B=-.14$ ,  $p<.05$ ) の偏回帰係数が有意であった。つまり、排他性規範が高いほど、学級適応感が低いことが示され、仮説 3



-2 を支持していた (Figure 2)。

高校生男子 ( $n=211$ ) では、目的変数に自集団適応感を投入したとき、step 2 での増分 ( $\Delta R^2=.05, p<.001$ ) が有意であり、排他性欲求 ( $B=.26, p<.001$ ) および排他性規範 ( $B=-.19, p<.001$ ) の偏回帰係数が有意であった。つまり、排他性欲求が低いほど、また排他性規範が高いほど、自集団適応感が低いことが示された。しかし、step 3 での増分は有意でなく、仮説 3-1 は支持されなかった。目的変数に学級適応感を投入した場合は、step 2、step 3 ともに増分は有意でなかった (仮説 3-2 を支持せず)。

中学生女子 ( $n=350$ ) では、目的変数に自集団適応感を投入したとき、step 2 での増分 ( $\Delta R^2=.02, p<.05$ ) が有意であり、排他性欲求 ( $B=.15, p=.01$ ) および排他性規範 ( $B=-.09, p=.05$ ) の偏回帰係数が有意であった。つまり、排他性欲求が低いほど、また排他性規範が高いほど、自集団適応感が低いことが示された。しかし、step 3 での増分は有意でなく、仮説 3-1 は支持されなかった。目的変数に学級適応感を投入した場合は、step 2、step 3 ともに増分は有意でなかった (仮説 3-2 を支持せず)。

高校生女子 ( $n=219$ ) では、目的変数に自集団適応感を投入したとき、step 2 での増分 ( $\Delta R^2=.04, p<.01$ ) が有意であり、排他性欲求 ( $B=.24, p=.001$ ) の偏回帰係数が有意であった。つまり、排他性欲求が低いほど、自集団適応感が低いことが示された。加えて、step 3 での増分 ( $\Delta R^2=.03, p<.01$ ) も有意であり、交互作用項の偏回帰係数が有意であった ( $B=.27, p<.01$ )。単純傾斜の有意性検定を行ったところ、排他性規範が高い場合のみ、排他性欲求の単純傾斜が有意であり (high:  $B=.39, p<.001$ ; low:  $B=.01, n.s.$ )、仮説 3-1 を支持していた (Figure 3)。目的変数に学級適応感を投入したときは、step 2 での増分 ( $\Delta R^2=.08, p<.001$ ) が有意であり、排他性欲求 ( $B=-.22, p<.05$ ) および排他性規範 ( $B=-.21, p<.01$ ) の偏回帰係数が有意であった。つまり、排他性欲求が高いほど、また排他性規範が高いほど、学級適応感が低いことが示され、後者は仮説 3-2 を支持していた (Figure 4)。

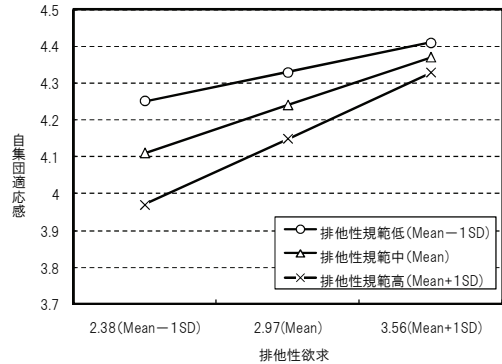


Figure 1 自集団適応感を目的変数とした階層的重回帰分析の結果 (中学生男子)

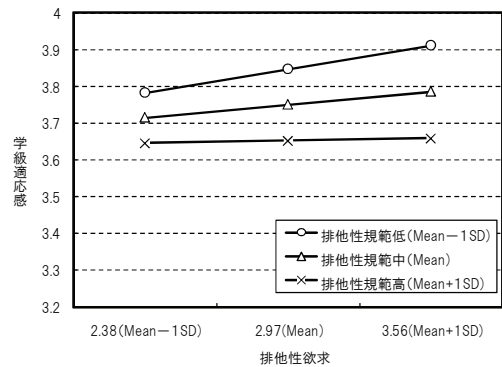


Figure 2 学級適応感を目的変数とした階層的重回帰分析の結果 (中学生男子)

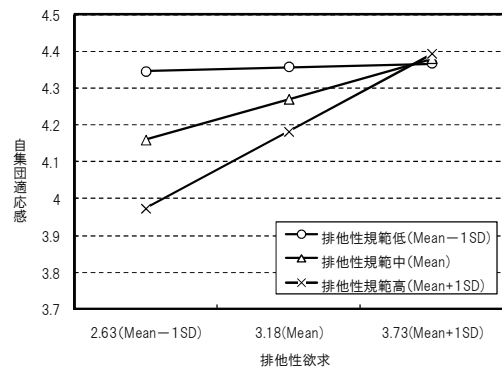


Figure 3 自集団適応感を目的変数とした階層的重回帰分析の結果 (高校生女子)

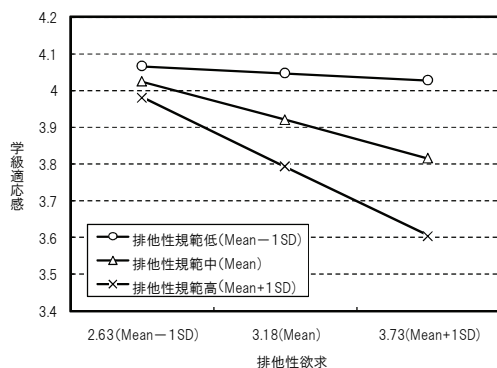


Figure 4 学級適応感を目的変数とした階層的重回帰分析の結果 (高校生女子)

## 考察

### 仲間集団の発達の変化

本研究の目的の一つは、仲間集団の排他的な特徴の発達の変化を検討することであった。まず、一緒にいる友人の数およびその友人がクラス内にいる比率を検討した。その結果、人数においては、学年差と性差が見られたが、性差に関して言えば、先行研究と同様に女子の方が小さな仲間集団を作っていることが明らかとなった。また、クラス内比率について検討したところ、交互作用が有意であり、中学生においてのみ性差が見られた。人数については、男子が平均7.60人であるのに対して、女子は、4.88人であった。これは三島 (2004) や黒川・吉田 (2006) の結果と比べると多いが、クラス外も含めていることや自由に人数を書き入れさせたため、多人数を書き入れた生徒の回答が影響していると言えよう。実際、中央値は男子が6.0、女子が4.0、最頻値は共に3であった。

中学生の仲間関係は、男子生徒はモノの交換やゲームなどを通しての活動を主体とするため、道具的であり、女子生徒は、おしゃべりなどを通しての感情の交流を主体とするため、情緒的であると言われる (e.g., Buhrmester, 1996)。その点では、4~5人というのは、グループでのおしゃべりを成立させるためには、ちょうど良いのかもしれない。また、女子生徒の方が男子生徒より少ないという本研究の結果もこうしたことを反映していると言えよう。さらに、中学生の女子生徒が同じクラス内に一緒にいる友人を作る傾向については、有倉・乾 (2007) の結果と同様であった。仲

間とおしゃべりなどの交流を続けようと思うと、どうしてもその交流は、狭い範囲に限定されてしまう。そのため、女子生徒の仲間関係がクラス単位で構成されてしまうのであろう。一方、高校生が中学生より同じクラス内に友人を作る傾向にあったことについては、校種特有の問題が考えられよう。小学校からの友人が他のクラスにもいる中学生と比べると、高校生は、校区が広いため、いろいろな中学校から生徒が入学してくる。そのため、活動を共にすることの多い自分のクラス内で友人を作りやすくなるからと言えよう。

次に、排他性に関する二つの指標について検討する。排他性欲求は、三島 (2004) が作成した排他性尺度によって測定されるものであり、「親和的・独占的かかわり」因子と、「排他的・固定的かかわり」因子から構成されている。本研究においては、中学生の方が高校生より高く、仮説1を支持していた。チャムグループに見られるような同質性によって仲間集団を構成したいという傾向が、中学生に強く見られることが改めて示された。また、性差においては、仮説2を支持し、女子の方が男子より排他性欲求が高かった。この結果は、有倉・乾 (2007) の結果と同様であった。なお、各因子についても校種×性の分散分析を行ったが、こちらは三島 (2004) の研究同様、前者においては性差が見られたものの、後者においては、性差は見られなかった。この結果から、女子は、仲間を独占し、一緒に行動したいという欲求を男子より強くもっているという点で、異なる特徴をもった仲間集団を構成していると考えられよう。

もう一つの排他性である排他性規範は、自分の所属する仲間集団の排他的行動規範を測定するものである。排他性規範でも、校種および性の主効果、交互作用が有意であった。下位検定の結果は、中学生においてのみ、性差が見られ、女子の方が男子より自分の所属する仲間集団が排他的であると評価していた。この結果は、仮説2が中学生にのみ支持されたことを意味する。中学生女子にとっては、自分の所属する仲間集団が、同じ価値観を共有し、一緒に行動する傾向が強いと理解していると言えよう。高校になって性差が見られ

なくなるのは、女子の仲間集団が排他的でなくなっていくためであり、男子生徒は中学・高校を通じて排他的な傾向は変化しない。これは、高校生になると、女子の仲間集団が異なる価値観を認められるピアグループへと移行していることを意味しているのかもしれない。

### 排他性が適応感に及ぼす影響

本研究で扱う排他性欲求と排他性規範は、個人の認知を測定しているため、実際、中程度の相関が見られ、関連性の高い概念である。しかし、欲求と集団規範といった異なる側面を測定しているという点から言えば、独立した概念と言え、実際、ひとりぼっち回避規範（大嶽ら、2005）との関係を見る限りでは、これらは概念上独立しており、その意味で尺度の弁別的妥当性はあると言える。

こうした変数間の特徴を考慮し、本研究では、前田（2008）に倣って、説明変数として投入する変数を中心化した上で、階層的重回帰分析を行った。その際、自集団適応感と学級適応感においても高い相関が認められたため、一方の適応感を中心化した上で統制変数として投入した。その結果、中学生男子および高校生女子においては、仮説3-1を支持し、自身の所属集団の排他性が高いと認知している場合に、自身の排他性欲求が低いほど、その集団における適応感が低かった。この結果は、排他性欲求と排他性規範が自集団適応感に及ぼす影響のあり方が限定的であることを意味しているが、中学生女子に支持されなかった理由と、高校生男子に支持されなかった理由は分けて考えるべきであろう。というのは、中学生女子の場合、排他性欲求、排他性規範共に他の3群（中学生男子、高校生男子、高校生女子）より高かったからである。その意味で、チャムグループにいと考えられる中学生女子にとって、そうした仲間集団にいることは他の3群ほど、適応感に影響しないのかもしれない。

一方、高校生男子においては、他の3群と比べると、相対的に自集団適応感と学級適応感との相関が高く、統制変数によって分散の多くが説明されてしまったことを挙げておくべきであろう。実際に、高校生男子においては、統制変数を投入し

なかった場合は、仮説3-1、仮説3-2を支持していた。

### 本研究の問題点と今後の課題

本研究は、思春期以降の友人関係における排他性の発達のな変化および、所属する集団や学級への適応感に及ぼす影響について、いくつかの知見を提供することができた。しかし、いくつかの問題点と今後解決すべき課題がある。まずは、排他性欲求として使用した三島（2004）の尺度が小学生を対象として作成されていたことである。小学生においては妥当性、信頼性のある尺度ではあるが、この尺度がそのまま中学生以上に適用可能かどうかは再考の余地がある。榎本（1999）で指摘されるように、仲間集団の様相が中学生と高校生でも異なることから、中学生や高校生にも使用可能な尺度開発をしていく必要がある。

次に、排他性に関する二つの指標を独立変数に用いている点である。構成概念上は独立していることは示したが、中程度の相関があることで、階層的重回帰分析の結果にも少なからず影響を与えていたと思われる。今後は、架空場面を用いた実験的手法を採用するなどして、本結果の妥当性を確認していく必要がある。

さらに、排他的な性質を帯びる青年期の友人関係の特徴について、排他性規範が十分な妥当性をもっているかどうかである。集団における排他性は、これまでに明確に定義された研究はないが、その語義や、グループダイナミックスの知見を考慮すると、集団凝集性が高く、独自の規範をもち、指示・命令的なリーダーが存在しており、外集団を受け入れないという特徴があると考えられる。この点について、学級内に作られる仲間集団においても同様の特徴があるかどうかを検討していく必要がある。

最後に、思春期の友人関係は発達的にみて、これまででも、同質性を基盤とするギャンググループやチャムグループを経て異質性を認め合うピアグループになることが示されてきた。その点では、冒頭で示したように、親密な人間関係を形成していく上で同質性を基盤とすることは必然的なことであろう。しかし、本研究も含め先行研究では、親密な仲間関係がどのような特徴をもつと排他的

になるのかについて、十分な検討がなされているわけではない。今後は、本研究の結果を踏まえ、こうした点にも着眼していく必要がある。

## 引用文献

- Aiken, L. S. & West, S. G. (1991). *Multiple regression: Testing and interpreting interaction*. SAGE publication.
- Buhrmester, D. (1996). Need fulfillment, interpersonal competence, and the developmental contexts of early adolescent friendship. In W. M. Bukowski, A. F. Newcomb, & W. W. Hartup (Eds.), *The company they keep: Friendship in childhood and adolescence*. Cambridge: Cambridge University Press (pp. 158-185).
- 榎本淳子 (1999). 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達の变化 教育心理学研究, 47, 180-190. (Enomoto, J. (1999). Socio-emotional development of friendships among adolescents: Activities with friends and the feeling for friends. *Japanese Journal of Educational Psychology*, 47, 180-190.)
- 保坂 亨 (1996). 子どもの仲間関係が育む親密さー仲間関係における親密さといじめー現代のエスプリ, 353, 43-51.
- 石田靖彦・小島 文 (2009). 中学生における仲間集団の特徴と仲間集団との関わりとの関連ー仲間集団の形成・所属動機という観点からー愛知教育大学研究報告, 58 (教育科学編), 107-113.
- 小泉令三 (1995). 小学校高学年から中学校における学級適応感の横断的検討 福岡教育大学紀要, 44(4), 295-303.
- 黒川雅幸・吉田俊和 (2006). 個人ー集団間の役割期待遂行度が仲間集団関係満足度に及ぼす影響 実験社会心理学研究, 45, 111-121. (Kurokawa, M. & Yoshida, T. (2006). Effect of peer-group role-expectation fulfillment on relational satisfaction. *Journal of Experimental Social Psychology*, 45, 111-121.)
- 黒沢幸子・有本和晃・森 俊夫 (2003). 仲間関係発達尺度の開発ーギャング、チャム、ピ
- アグループの概念にそってー 目白大学人間社会学部紀要, 3, 21-33.
- 前田和寛 (2008). 重回帰分析の応用的手法ー交互作用項ならびに統制変数を含む分析ー比治山大学短期大学部紀要, 43, 69-73.
- 三島浩路 (2004). 小学校高学年のインフォーマル集団の排他性に関する研究 生徒指導研究, 15, 51-56.
- 三島浩路 (2008). 仲間集団指向性尺度の作成ー小学校高学年用ー カウンセリング研究, 41, 129-135. (Mishima, K. (2008). Development of the scale of peer group inclination: For upper grades elementary school students. *Japanese Journal of Counseling Science*, 41, 129-135.)
- 大嶽さと子 (2004). 「ひとりぼっち回避規範」に影響を及ぼす諸要因の検討ー個人的要因の観点からー 日本グループダイナミクス学会第51回大会発表論文集 pp. 180-181.
- 大嶽さと子・石田靖彦・吉田俊和 (2005). 改訂版「ひとりぼっち回避規範」尺度の検討 日本グループダイナミクス学会第52回大会発表論文集 pp. 154-155.
- Schachter, S. (1951). Deviation, rejection and communication. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 46, 190-207.
- 遠矢幸子 (1996). 友人関係の特性と展開 大坊郁夫・奥田秀宇 (編著) 親密な対人関係の科学 誠信書房, pp. 89-116.
- 有倉巴幸・乾 丈太 (2007). 児童・生徒の友人関係の排他性に関する研究 鹿児島大学教育学部研究紀要 (教育科学編), 58, 101-107.